

ハイデッガーに於る有の問と歴史

溝 口 宏 平

本論文は、「有と時」以降ハイデッガーの思索の事柄となった「有の歴史」に於て、歴史が一体如何なるものとして捉え出されて来たかを、彼の中期の代表的論文「ニヒリズムの有歴史的规定」(N. B. II. VI)を中心として、把握することを目的としている。

「有と時」以後のハイデッガーの思索は、所謂「転回」(Kehre)を経て、「形而上学の根拠へ還り行くこと」として形而上学の本質を経験し思索することであり、而もそのことが「有の問」(Seinsfrage)と一つに於て為されるような思索として特色付けられる。そのように形而上学の根拠へと還り行くことの内で、而もその還り行き自体がそのようなものとして経験されてくるところのものが、有の歴史であり、有の命運 (Geschick) である。

では、その場合、歴史と言われ、有の歴史と言われるものは一体如何なるものであろうか。

ハイデッガーにとって歴史とは、ヨーロッパの形而上学の歴史である。併し「形而上学が西欧のそしてヨーロッパ的に規定された世界歴史の歴史根拠 (Geschichtsgrund)」(H. W. S. 244)と見做される点に於て、形而上学の歴史は、ヨーロッパの歴史そのものである。形而上学が歴史根拠であるということは次の事を意味している。即ち世界歴史は諸々の人間の出来事として現有 (Dasein) のその都度の実存可能性を主導し規定する或る有の理解 (Seinsverständnis) に基づき、そういう有の理解は、ヨーロッパに於ては形而上学として語り出されているということ。

諸々の世界歴史的出来事の根底にそういうものを可能にし、その場面を開く或る有の理解が形而上学として存しているのである。そのような意味での形而上学の歴史は、歴史で有るという点から言えば、現代の吾々がその内に自己自身を見出すところのものとして所謂現実そのものでもあるところの一定の有の理解を伝承的に規定して来たものとして、過ぎ去ったものではなくして常に、現在である。ハイデッガーに於て生起して来た「有の問」は、そういう有の理解を有の理解として問題化することとして、形而上学の本質を問うことであり、それはまた既有として尚現代的なるものとしての歴史の本質由来を問うことでもある。

形而上学の本質への問は、併しハイデッガーにとって歴史の法則付けや形而上学の根拠付けを意味している訳ではない。それは今や「有の真性への問」(die Frage nach der Wahrheit des Seins)として問われる。つまりハイデッガーに於て「有と時」で経験されていた世界としての世界の「無」(Nichts)は、「有るものとしての有るものの根源的開け」(die ursprüngliche Offenheit des Seienden als eines solchen W. i. M. S. 34)として有の現成 (Wesen)と経験され、そこから有が有るものを出会わしめる「不覆蔽性」(Unverborgenheit)と云う意味での「真性」(

Wahrheit)として現成すると見做されて来る。即ち経験されたる無は、有るものの真性 (Wahrheit des Seienden)として現成している有自身とされるのである。従って「有の間」はその無の経験から生起しているが故に、そういう無から呼び掛けられ、且つそこへと問い思索して行くものとして、無を思索する事であり、それがまた有としての有 (das Sein als solches) への問とされ、有の真性への問とされるのである。併し、無の経験は、また「有と時」へと還し見られるならば、差し当っての有の理解の問題化であると共に、そのものの根底からの経験でもあった。つまり有としての無の経験は伝来せる有の理解としてある形而上学の問題化であると共に、形而上学そのものの経験であり開示でもあったのである。つまり形而上学は有の理解を語り出し、時代の有の解釈を規定し支配して居り、そして無として経験される様な有るものの真性を語り出しているのである。従って形而上学の本質への問は、形而上学を有るものの真性として捉え、更にそれを有自身の現成するものとして思索することである。では形而上学の歴史はどのようなものとして捉えられて来ているのであろうか。

ハイデッガーにとって、形而上学の歴史は、諸々の哲学的教説の総体ではなくして、内容は如何にあれ、時代を基礎付け規定する様な仕方で、古代ギリシヤ (アナクシマンドロス) からニーチェ迄、一貫して同一の思索のあり方をとり、且つ同一なるものに関わるものとしての形而上学の歴史である。

形而上学の有する本質的同義性、一貫性は、ハイデッガーに依れば、「有るものと有との区別の忘却」 (die Vergessenheit des Unterschieds des Seins zum Seienden) という点に有る。(H. W. S. 336) 即ち形而上学はその初めから「有るものとは何であるか」と云う問のもとに、「有るものとしての有るもの」を問うていて、その際有るものから有るものへと思索され表象される限りに於て、有が問われ思索されるのであって、有が有として思索されることはない云うことを言う。

併しながらハイデッガーは、「区別の忘却」と云う点に関しては形而上学の一貫性を認めつつも、その元初 (Anfang) に於ては、その区別は区別として思索されていないが経験されている。それ故区別が明るめられている (H. W. S. 336) と見做している。その元初とは、古代ギリシヤ、プラトーン以前を意味しており、その点に於てハイデッガーは、古代ギリシヤの内に真正な有の経験を認めるのであり、従って有の根本義は其処に於て語り出されたものの解釈から得られている。併しまた元初に於て区別が区別として、従って有が有として思索されず、また思索され得なかったが故に、プラトーン以後の所謂形而上学、即ちハイデッガーに依って「有るものの有」 (das Sein des Seienden) もしくは「有性」 (die Seiendheit) に依って特色付けられる形而上学もその元初に於ける区別の忘却に依って規定されて来る。それ故ハイデッガーの思索にとって元初は、或る意味では、二重の仕方で行なわれ形而上学の歴史にとって基準附与的にあるとも言える。つまり(1)元初に於て区別が明るめられている点に於て、有が一体如何なる点から思索されねばならないかを元初が提示する。(2)にも拘らず区別が区別としては思索されていない点に於て、元初

それ自身の内に後の形而上学の本質体制の可能性が蔵されている。

このことは、後の形而上学に於ける有と有るものとの取り違えが元初に於ける区別の忘却に因果的に由来するということの意味しているのではない。むしろ有が区別という形で真正な仕方を経験されているながら、そのものとしては思索されない。即ちハイデッガーに依れば有の「露開」(Entbergen)にして同時に「覆蔵」(Verbergen)と云う性格が、元初に経験されていると云うことが、後の形而上学が有と無関係な迷妄の歴史であるのではなくて有それ自身の歴史であることを、つまり時間系列的な因果関係による形而上学の連鎖ではなく、「命運の測り難きあり方の内で、そして変化する直接性から、思索へと関わって来る同じきものの唯一の近さ」(H.W. S. 196)と言われる如き、形而上学の歴史の同義性を観取可能にするのである。さて、ハイデッガーに従えば、古代ギリシヤに於て「有り」を意味する *on* は、次の様に経験されていたという。

即ち「不覆蔵性の内へと現前する」(anwesend in die Unverborgenheit) (H.W. S. 320)。と共に *on* はその分詞的性格から「有るもの」従って「現前するもの」(das Anwesende)をも意味して居り、その二義性の内に与と有るものとの区別が既に蔵されているのである。(H.W. S. 317)

その場合、「現前」(Anwesen)とは、現代的に (gegenwärtig) 有るものも非現代的に (ungegenwärtig) 有るものも共にそういうものとして一つの現前へと取り集められる (versammeln) 様な仕方で不覆蔵性の内へと到来する事 (ankommen) を意味する。そしてこの様なギリシヤ的有の経験の内に、現前としての有と不覆蔵性としての真性との本質的な関わりが洞見されてくるのである。つまり「現前」の内に「時」の現成が見られ、その時性が「有と時」で示された如く脱目的統一として地平性格を持ち、従って世界というものを可能にするのであり、それ故現前としての有は、その様な地平、つまり有るものの不覆蔵性として現成しているのである。即ち、現前するものの現前と、現前するものの不覆蔵性とは同じ事柄を言い表わしており、「有自身は、その内で有るものが現前するところの不覆蔵性として現成する (wesen)」(NBⅡ, S. 353) のである。併しこの事は、現前としての有が明るみにもたらされている事を意味している訳でも、またその様に古代ギリシヤに於て把捉され思索されたという事を意味している訳でもない。真性の有への本質的帰属は、ハイデッガーに於ける無の経験が、有の現成として捉えられること、即ち区別が区別として現成することに依って初めて露わになって来る事柄である。併しまた無として *aletheia* が経験されていることは、真性があるものの真性であり、有るものから経験された限りでの有の経験として、即ち有が不覆蔵性として有るものを現前せしめつつ、まさしくその事に依って自らを覆蔵する事の経験として、無としての有は思索される可きものに留まっているという事をも意味しているのである。併しではギリシヤに於てその様に経験されながらも、有が有として思索されず、現代に到る形而上学の歴史に於ても思索されなかったことは、一体如何なる事態を意味するのであろうか。またそれは如何なる点から思索されるのか。

形而上学的思索は、ハイデッガーに依って以下の様に特色付けられている。即ち、形而上学は、先述の様に「有るものとしての有るもの」を問うている。それ故其処に於て顧慮され問題となる「有」は有るものから有るものの方へと戻る様な仕方でのみ問われ思索される様な「有るものの有」である。つまり「そこからして全らゆる有るものがそのかくかく有る事 (So-und-So-sein) に関して共通にして普遍的な「何」 (Was) を汲み取って来る様なもの」即ち有るものの「何性」 (Washeit)、「本質」と呼ばれる様なものとして思索されている。と共に併しまた有るものが何性 (有るものの有) に向って問われそしてそこからして有るものとして規定されて来ることの内には、既にまた有るものは、それが一般に有るという見遣り (Hinsicht) の内で経験されているという事が含まれている。それ故同時に、本質に適っている様な有るものとしてとそうでない様な有るものとの区別が生じて来る。つまり諸々の個々の有るものを貫いて普遍的に存する様な恒常的に有るもの (Beständige)、即ち「実有」 (ousia) と言われ「基体」 (hypokeimenon) と言われる様なものが有るものとして思索され語り出されて来る。形而上学が有るものとしての有るものをその essentia と existentia とを顧慮し乍ら思索しつつ問う事に於て、有は恒常的に眼前に存する様な有るもの (das Vor-liegende) という意味での「有るものの有」として捉えられて来る。併しまたそうであるが故に実有として把捉されているものは、総じて有るものの根拠であり、而も有るものがそれである様な実有自身をも可能にするものとして「最高度に有るもの」、「神的なるもの」 (theion) へと取り集められる (versammeln)。この様に形而上学は、有るものをその有を顧慮しつつ (hinsichtlich des Seins) 語り出す点に於て「有一論」 (Onto-logie) である。(※ハイデッガーは、logos を集摂 (Versammlung) と訳す。それ故有論 (Onto-logie) とは die Versammlung des Seienden auf seine Seiendheit の遂行である (H.W. S. 163)。それが実有性への集摂であるという点に、先述の元初に於ける「現前するものを現前に於て集摂しつつ保蔵する事」からの変化、即ちプラトンに於ける形而上学の始まりが存している。) と共にまさしくその故にまた、有るものの統一の根拠としての最高度に有るものを思索し語る (legen) 点に於て「神一論」 (Theo-logie) なのである。ハイデッガーは、そういう「有一神一論」 (Onto-Theo-logie) という有り方をプラトーン以来ニーチェに到る迄の形而上学の本質体制と見做している。

即ち形而上学にとって有は有るものの有であり、而も再び統一根拠としての主体としての有るものと見做されているのである。その限り有としての有は思索されていないのである。併しそれにも拘らず、形而上学の内では、その間に於ても「有るものがある」「何で有る」として有が語り出されている。即ち形而上学は有るものとしての有るものを思索しつつ、その思索を既に有の内を負っている。それ故「有の顧慮」或いは「有から思索する」という事は、形而上学に於ける有の忘却と共に有への依拠性をも意味する。即ち形而上学は「有るものとしての有るもの」を思索しつつその「として」 (als) 自身を思索しないが、その「として」自身に負っている。そしてその「として」の内には、「有るものが不覆蔵である」が意味されて居るのであり、その「とし

て」は、「それらの本質に於ては思索されていない不覆蔵性」を名付けているのである。(NB Ⅱ, S. 351) 併しこの場合の不覆蔵性は、先述の元初に於ける aletheia の不覆蔵性と同義に取られる可きではない。何故ならこの場合の不覆蔵性は、形而上学自身が有るもの全体についての真性 (die Wahrheit über das Seiende im Ganzen) としてそれである様な「有るものの不覆蔵性」を指しており、形而上学に於ては、有るものが既にそれが主体である様な仕方では明められている (unverborgen) ということの意味しているからである。それ故有るものが本当の意味でそもそも有るものとして出会われていて、その上に形而上学的思索に依って幻想の如きヴェールが覆いかけられるということが意味されているのではない。

(もしそうなら形而上学の歴史は単なる迷妄の歴史になる) 形而上学は、それが諸々の有るものの根拠を思索するが故に「有るもの全体についての真性」であるのではなくて、形而上学にとって有るものが既に根拠的主体として思索される様な仕方では出会われて来ているが故に、即ちその様な不覆蔵性としての真性の内にあるが故に、有るもの全体についての真性なのである。この点にハイデッガーの云う形而上学の歴史の持つそれ自身では意のままにならぬ schicklich な性格、即ち有の命運としてあると云う性格が存していると言える。

従ってハイデッガーに依る形而上学の本質の思索は、形而上学を、それが一貫して「有一神一論」的体制を有する点に於て、形而上学に於て出会われ思索されて来ている「有るものとしての有るもの」の不覆蔵性へと、即ちそういう不覆蔵性として現成せる有へと問い戻し (auf das Sein zurück) 思索するということであり、それが「有をその真性に於て、回思すること」(an-denken), 「有歴史的思索」(das seinsgeschichtliche Denken) と言われるものなのである。では、そのような点から見られるならば、形而上学の歴史は、有の歴史としては一体如何なる事態になっているのか。また歴史とは一体何であるのだろうか。

ハイデッガーは、形而上学の歴史をその全体に於て、形而上学が有るものとしての有るものを思索しつつも決して有自身を思索していないという点からニヒリズム (Nihilismus) だと指摘する。それは所謂現代を特色付けて来るところのニヒリズムの本質は形而上学それ自身の歴史の内に求められねばならないということの意味している。それは前節で触れた様に、歴史は現代の吾々が自らのものとし、またせざるを得ないところの或る有の理解を集約的に吾々に伝承して来ているからである。たとえ過去の有の理解を選択しようとも、それはまた現代通用せる有の理解の無自覚な承認でしかない。それ故、ハイデッガーに於て無として経験された有の理解は、形而上学の歴史の問題化であり、形而上学の歴史を無として而も無として現成せる有として経験していることに他ならない。それ故、次の様に言われる。「ニヒリズムの本質は、其処に於て有自身に関しては無である様な歴史である。」(Das Wesen des Nihilismus ist die Geschichte, in der es mit dem Sein selbst nichts ist. NB, Ⅱ, S. 338) 併しまたその「無」は先述の有歴史的思索の有り方から言って、二重の意味の無を言い表わして来る。即ち、(1)「有それ自身は、その内で有るものが現前するところの不覆蔵性として現成するが、併し不覆蔵性自身はそれとしては覆蔵されたままに留まっている。」

(2)併し形而上学に於ては、形而上学自身その不覆蔽性であり乍ら、而もその不覆蔽性を、それ自身を覆蔽しつつ現成している有としては認めること (anerkennen) も思索する事もない。

(「認める」とは、有自身の覆蔽を覆蔽として認める事。そしてその様にして有をして全き問題性 (Frageüridigkeit) の内で支配せしめ、かくして有の間を耐える様な仕方です。保持する事 (aushalten) を言う。NB. I, S. 338) この二重の有に於ける無は、ニヒリズムの本質統一性 (Wesenseinheit) を構成しているものとして思索されねばならない。

まず第一の事柄は、有自身の不在 (Ausbleiben)、有自身の自己脱去 (ein Sich-entziehen des Seins selbst, od. Entzug) と云う有自身の根本動向を指して居り、ニヒリズムに於ける本来的なもの (das Eigentliche)、ニヒリズムの本質であると言われる。従ってそれはまた形而上学の本質でもある。この「不在」「脱去」という事柄は極めて理解し難い事柄である。何故なら有の脱去は、有るものからの有の離脱でも、有の奪取でもなく、また背後の世界へ引き退る事でもなく、有はまさしくその不在として、脱去として現成し、そしてそれが有自身だからである。「有としての有の不在は、有自身である。」(NB. II, S. 353) では如何なる事態として理解する可きなのであろうか。

有の脱去とは、有がそれ自身現成しつつも形而上学に依って思索されぬという形而上学的思索に依る覆蔽を意味している訳ではない。思索に依る覆蔽は、それ自身有の脱去に基づいているのであり、「有としての有の不在」の脱漏 (Auslassen) として、ニヒリズムの本質統一に於ける (先述の二番目の) 非本来的なもの (das Uneigentliche)、非本質 (Unwesen) なのである。(この事は後に触れる。Vgl. NB. II, S. 357~361) 従って有が有るものの不覆蔽性として現成する事自身が有の脱去であると言わねばならない。併しそれはたとえば光に依って物は見えるが光自身は見えないという様な事を意味している訳ではない。(この事はむしろニヒリズムの非本来的な相にあてはまると思える。) 即ち先述の如く、形而上学がそれであるところの有るものとしての有るものの真性—有はそういう真性として現成しているのだが—それ自身が有を脱去せしめている。つまり有は、まさしくそれによって自らを覆蔽せしめる様な有るものの真性として現成すると考えられる。従って形而上学を特色づける有るものの不覆蔽性と、元初に於ける真性の本質としての不覆蔽性とは明らかに異っていると考えられねばならない。吾々は、このことをさしあたってはハイデッガーの言う有の放棄 (Seinsverlassenheit) から見ることに留めて置こうと思う。ハイデッガーは次の様に述べている。「有自身がそれとして現成するところの脱去は、有るものから有を奪い取りはしない。それにも拘らず有るものは、それが有るものとして有り、そしてただその様にしてのみ有る時、まさしく有自身の脱去の内に立っている。吾々は次の様に言おう、即ち有るものは有自身から見棄てられている (Das Seiende ist vom Sein selbst verlassen.) と。」(NB. II, S. 355)

形而上学にとって、有は有るものの有として眼差しの内にある。そして、その有るものの有は一貫して根拠的性格を持つ主体として思索されて来ているとされた。それ故其処では、有るもの

はその主体なのである。即ち「有るものは、第一実体 (prote ousia) としてその都度のものの現前に於て卓越さを有しているところの基体 (hypokeimenon) という意味での主体 (Subiectum) である。」(N.B. II, S. 451) だからして形而上学は常に主体の主体性 (Subiectität) を思索するのであり、その点からまたハイデッガーは「有は、形而上学としてのその歴史に於て徹頭徹尾主体性である」(N.B. II, S. 451) と言うのである。併しこのことは主体が思索によって考案されたものに過ぎないということを意味している訳ではない。其処では、有るものはまさしく主体として出会われているのである。そして先述の如く、そういう主体の不覆蔵性として有は現成している訳である。併し有るものが主体として開かれる事に依って、その都度現前する有るものは、最早有るものではない様な有るものになってしまう。それは本当に有るのではない様な有るものとして、その根拠的主体から基礎付けられ、また基礎付けられる様な仕方でのみ有るような有るものへと変じ、そのものとしては認められなくなってしまふ。(たとえば、現象として認められるという事は最早認められていない事である。) この様な事態が有るもの全体に関わって来るところの有の放棄なのである。その様に有自身が、有るものとしての有るものの真性として現成し、有るものを主体として出会うしめることに依って、有るものを有自身から verlassen せしめる事が有の脱去のあり方であり、それが「有るものとしての有るものの不覆蔵性に於ける有の不覆蔵性の不在」であると言えよう。その様に有自身が自己を抑制している事 (Ansichhalten) がニヒリズムの本質に於ける本来的なものなのである。そしてこの自己抑制が、その都度の脱去の遠さから (aus der jeweiligen Ferne des Entzugs) 有自身の epoche として、その都度有の歴史のエポック (Epöche) を規定するとされるのである。(N.B. II, S. 383 od. vgl. H.W. S. 311) 併し有は、その様に脱去しつつ脱去として、即ち有るものとしての有るものの真性として自らを贈り与える。然るに形而上学は、そういう有としての有の不在を不在としては認めないし、思索しない。この不在が不在としては思索されて居らぬ事、それをハイデッガーは不在の脱漏 (Auslassen des Ausbleiben) としてニヒリズムの本質に於ける非本来的なもの (das Uneigentliche) と呼んでいる。併しこの非本来的なものは、また欠如的なものでも、本質から離反した非本質でもない。それは「本来的なものの完成」(Vollendung des Eigentlichen) であり、有の不在をまさしく不在たらしめるのである。何故なら有としての有の不在が其処に於て不在として滞在し、そして有自身の覆蔵性 (Verborgenheit) が滞在する処、その様に有が到来する宿処 (Unterkunft) が人間の本質であり、思索 (Denken) の本質だからである。その宿処は、併しまた有と離反した有り方をしているのではなく、有の到来 (Ankunft) 自身に於て到来す宿処であり、それ故その宿処は、有自身に属すると共に有自身であるのである。それ故に次の様にも言われている。「有としての有の所在の在所 (所在の本質にして有が現成するところ) は有自身である。併しこの在所は人間の本質である。」(Die Ortschaft des Ortes des Seins als solchen ist das Sein selber. Diese Ortschaft aber ist das Wesen des Menschen.

N.B. Ⅱ, S. 357 なお Ort, Ortschaft の訳語と意味合いに関しては『根拠律』邦訳の辻村教授による訳註(10)、(218)260頁、321頁参照) そういう人間の本质は「有と時」で言われた「現一有」(Da-sein) に他ならないのであり、この有歴史的思索の時期に到って「脱自的実存」(Ek-sistenz) とか Inständigkeit (内立性、または内覚性) と呼ばれて来る。そして、そういう内立性が、即ち「有の在所の開けの内に脱自的に内立する事」(das ekstatische Innestehen im Offenen der Ortschaft des Seins) がハイデッガーに依って思索の本质とされるのである。(その点から云って、ハイデッガーに於ては思索は人間の有そのものでもあり、有の理解そのものでもある。ハイデッガーはそれ程「思索」を広義にかつ根底的に捉えている。従ってハイデッガーの思索自体は、最早実践から区別される様な思索ではないのである。次の様な文章を参照。「思索が有の人間の本质への関わりを成就する。」(Das Denken vollbringt den Bezug des Seins zum Wesen des Menschen. U. D. H. S. 5)

その様に思索の本质が見られるならば、形而上学に於て有としての有が思索されないままに留まる事(Ungedachtbleiben)は、有自身が不在であり、脱去している事を意味する。そして形而上学の思索が、有るものを有るものとして思索しつつ、その内に不在としての有を秘めていること、即ち自ら知ることなく有の不在を語り出していることは、まさしく思索が不在の内にある、不在そのものに依拠し、それ故不在としての不在を覆い隠し、かくして不在そのものを完成せしめている事を意味するのである。そしてそういう完成は、近世になって主体性(Subiectität)が主観的主体性(Subjektivität)となり、その主観的主体性がニーチェに到って「力への意志」として経験され、それ自身形而上学的であり乍ら、形而上学を逆転しニヒリズムを克服するとされるに到って全き仕方ではなされるのである。

吾々は、ハイデッガーに依る形而上学の解釈の基本的なあり方をみて、歴史の推移に対する彼の考え方を取り挙げ得なかったが、簡単に触れて置くならば、今や形而上学が全体としてその本质に関して問われる事、そして問われざるを得ないという事の内に、形而上学の完成(Vollendung der Metaphysik)という事態が意味されている。形而上学の完成とは「主体性の完成」である。主体性の完成とは、形而上学がその初まりに於て既に蔵していた可能性がそれ自身を顕わにし、確固とした支配に到る事であり、それは有が主観的主体性つまり res cogitans としての ego が主体になる事、そしてその真相がニーチェに到って「意志への意志」として顕われて来る事なのである。近世になって、デカルトに於て真性の本质が確実性となり、ego が第一の主体となって以来、有るものの有は被表象性(Vorgestelltheit)であり、有るものは客体として表象される(前立される Vorstellen)事に依って初めて確実に有るものになる。其処では主体たる「吾」も、その表象作用それ自身の内で表象する主体として立てられてのみ有るのである。(Vgl. N.B. Ⅱ, S. 160, S. 162, S. 164, H. W. S. 84, S. 100)そして、そういう確実性を保証するものは計算的思索(rechnendes Denken od. Berechnen)なのである。表象は、その様にして全ての

ものを対象 (Gegen-stand) の統一へと取り集める様な仕方では有るものを確保する事 (Sicherung) であり、主体たる人間は、自らを有るものの真中で、表象的-製作的に (vor-stellend-herstellend) 有るものを对象的なるものとして吾が物とする様な有るものとして、立ち上がらせる (aufrichten) ののである。そういう対象化 (Vergegenständlichung) の内では、有るものは有自身から全き仕方で見棄てられているのである。何故なら、其処に於て唯一有るものは「自身を自身の上に立て、そして自身を自身の前へともたらしめて来るもの」 (das Sich-auf-sich-stellende und Sich-selbst-vor-sich-bringende N.B. II, S. 382) としての主体であり、「意志への意志」 (Wille zum Willen) に他ならず、有るものは全体に於てそのものとしては決して有るのではない様なものになってしまうからである。そして、そういう主体性の本質がライブニッツ (彼の言う appetitus をハイデッガーは挙げる。Vgl. N.B. II, S. 452) を経てニーチェに到り、本質そのものが「力への意志」として語り出され、有が価値となるに到って形而上学は完成するのであり、有の真性の最極端な脱去 (der äußerste Entzug der Wahrheit des Seins) の時代が始まる。それは、ニヒリズムが主体性に依って克服されると見做される事に依って、その脱去自体が最早認識不可能にまで覆蔽されるという仕方での有の全き覆蔽性の到来であり、ニヒリズムの完成に他ならないのである。(Vgl. N.B. II, S. 387) その様にして非本来的なるものは、本来的なるものを完成せしめるのである。

実際、ハイデッガーは不在が不在として思索される為には、前以て有自身が自身の不在を有自身の到来として経験す可く人間の本質に要求して来る (zumuten) 事がなければならないとしているのであって (N.B. II, S. 367)、それ故、形而上学の歴史に於て不在が脱漏している事は、決して思索の怠慢などではなく、有が自らを抑制しつつ、贈り与えているところの有るものの真性に呼応する事として、或る意味では、有の不在への真正な応答とも言えるのであり、其処には有への関わりが保蔵されているのである。即ち、其処では有はそれ自身脱去しつつも、脱去として宿処たる人間の本質に不断に関わり、「離れ-止む事-なきもの」 (das Un-ab-lässige N.B. II, S. 391) なのである。この事から有の「必迫」 (Not) が言われ、有が Brauchende であり、人間が Ge-brauchte と言われる。(N.B. II, S. 390~391) それ故、ハイデッガーは、また有の不在は有が自身の到来を確約している (versprechen) 事であるとも言う。(N.B. II, S. 369) (この事がハイデッガーをして待ち焦れつつ内立する事 (das harrende Innestehen N.B. II, S. 377) と言わしめ、従って、有の間を問わしめるのである。)

その様にニヒリズムの本質が本来的なるものと非本来的なるものとの本質統一性から見られるなら、本来的ニヒリズムであり、歴史そのものである形而上学の歴史は、それ自身不在の脱漏の歴史として非本来的なるものであり乍ら、その内に自身を確約を覆蔽しつつ保蔵 (Verwahren) している歴史なのである。そういう歴史の本質をハイデッガーは密旨 (Geheimnis) と呼ぶ。(N.B. II, S. 370) 「形而上学の本質は、形而上学が有自身の

確約の密旨の歴史であるという点に基づいている。」(N.B. II, S. 370)

併し、その様に形而上学の歴史が密旨として捉えられて来る事は、ハイデッガーに於て有自身の不在がまさしく不在として到来し、経験されている事に他ならない。(不安に於て、無が有の不在として経験されているのである。Vgl. N.B. II, S. 393)そしてその不在としての不在の経験に於て、内立的にして応答的に思索する事は、有が自身脱去しつつも、贈り与えて来ているところの有るものとしての有るものの真性の中にあって、その真性を真性として、従って不在として現成せる有として経験し、思索する事である。それ故、不在としての不在の到来に於て初めて、形而上学が密旨として、それ故思索さる可きもの(das zu Denkende)として露わになって来るのである。

従って、形而上学の歴史は、過ぎ去った歴史ではなく、ヨーロッパ的世界を根底から規定しつつ現代へと伝承されたるものとして、その全体に於て有の歴史の密旨として、そしてまた、そういう歴史として、即ち不在の歴史として現成せる有として、不在としての不在の到来に於て到来しているところのものなのである。それ故、ハイデッガーはそういう歴史を「有ると云えるもの」(das, was ist)と言い、既に生起してしまっているが、有の本質の内へと取り集められ、今や到来しているものとして das Ge-Wesen と言うのである。(N.B. II, S. 388)

その様にハイデッガーに於て、歴史は思索さる可きものとして到来している有の密旨であり、それへと向思する(entgegendenken)有歴史的思索にとって、「それとして有自身の真性が現成するところの開け(das Freie)への通路を与える(gewährt)」(N.B. II, S. 397)ものなのである。

引用著作の略記

W. i. M. = Was ist Metaphysik

U. d. H. = Ueber den Humanismus

H. W. = Holzwege

N. B. II = Nietzsche 第2巻

[哲学(西哲史)博士課程二回生]